



第 14 回

理想のプレーをともに追って

上 治 丈 太 郎

ueji jotaro

あのと、日本中の目が本田圭佑の足元に注がれていた。2013年6月4日、サッカーW杯アジア最終予選のオーストラリア戦。引き分けでも日本代表のW杯本戦出場が決まるというあの試合だ。後半ロスタイム、日本は0-1と劣勢に立たされていた。そんな場面で得たPK。だれに相談するでもなく、あたりまえのように本田はペナルティスポットに向かう。鋭い眼光をした本田の左足が一閃！放たれたボールはGKの真正面を襲い、ゴールに突き刺さった。

日本中が歓喜に包まれた。東京・渋谷のハチ公前スクランブル交差点では、喜びに沸き返る若者たちを巧みに整理・誘導した「DJポリス」が出現し、一夜にして“スター”になった。スポーツの持つ影響力の大きさを感じさせられる出来事でもあった。

今回のゲストは、そんなゴールを生み出した本田のスパイクの生みの親ともいえるミズノ株式会社の上治丈太郎相談役だ。アスリート以外でお迎えする初めてのゲストになる。スポーツメーカーの枠にとどまらず八面六臂の活躍をされている上治氏に、意外と知られていないスポーツビジネスの世界について、たっぷりお話を伺った。

聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

オリンピックは2年に一度 やってくる

オリンピックが2年おきにやってくる感覚になりましたから、もう年がら年中、オリンピックのことを考えています。

— 「趣味はオリンピック」とおっしゃる上治さんが、オリンピックに深くかかわるようになったのはいつからですか。

1988年のソウル大会からですね。現在は東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会の理事長を務める水野正人前会長が社長になるとき、オリンピックのプロモーション部隊をつくってくれということで、7人ほどでスタートしました。国際化が求められるので、英会話学校に通いながらいろいろやり出して現在に至ります。

— 当時は4年に一度だったオリンピアドですが、1994年のリレハンメル大会から冬季大会がずらされましたね。



2004年アテネオリンピック開会式。“炎で描かれた五輪”

スポーツ市場を変革させた カール・ルイス

— 昔は、ユニホームや用具類のブランドネームを隠す時代もありましたよね。それが今は選手とメーカーが契約し、公表され、一般の人はそのことでメーカーの名前を覚え、親しみを感じるといった時代が変わってきました。今やスポーツメーカーがオリンピックを支えているといっても過言ではないと思いますが、そのきっかけはいつごろからでしょうか。

サッカーのペレ（ブラジル）が、1970年のメキシコW杯大会のある試合で、キックオフのときにレフェリーに「ちょっと待ってくれ」と言って、ボールの上でプーマの靴のひもを結び直して数万ドルのボーナスをもらったという逸話があります。

トップ選手の使用するものが本格的に市場に影響力を持ち始めたのは、やはりカール・ルイスからでしょう。彼がデビューして以降、ルイスが使うもの、あるいはCMするものが非常に売れるようになりました。ミズノは1987年にアドバイザリースタッフ契約を結びました。彼のシューズは当

社のグローバルブランドである「ランバード」でした。スポーツ店がそれをいちいち説明しなくても、「ルイスが履いている靴をください」というような買われ方をするようになりました。



ソウルオリンピックで100m、走幅跳の2冠となったカール・ルイス

— 陸上の華・男子100メートルですが、ソウル大会ではベン・ジョンソンが9秒79。カール・ルイスは9秒92で2位でした。しかし3日後、ジョンソンの薬物違反が発覚して、ルイスが逆転金メダルとなったのです。私たち放送関係者はソウルのホテルに同宿していましたが、隣がカナダの放送スタッフで、「ワッ」と大きな声があがったのを今でも覚えています。

ルイスは走り幅跳びでも優勝しソウル大会は2冠でした。(200メートルは2位、4×100メートルはルイス不出場のレースで失格) そのソウル大会から92年バルセロナ大会までの期間、ルイスの金メダルのセールス効果は非常に大きなものでした。

鳥肌モノの走り、フローレンス・ジョイナー

ソウル大会の直前の88年7月、インディアナポリスでの全米予選に私は行きました。そのとき、フローレンス・ジョイナーが10秒49という世界記録で100メートルを走り抜けたのです。

— 飛び抜けた記録でしたね。

もう鳥肌が立ちました。当時、ジョイナーは他社のシューズを履いていました。駄目元で「契約交渉をしたい」と申し出たら、「いいよ、26.0センチを持ってきて」とあっさり

言うのです。定番の市販品なのにドンピシャでした。そこからトントンと話が進み、契約がまとまりました。

— 華麗な選手でしたが、彼女にはドーピングの噂もありましたね。

たしかにその疑惑はささやかれていましたが、本人は「私はやっていない!」と言いました。私たちとしてはそれを信じるべきだと判断しました。

— ジョイナーはソウルオリンピックで、女子100メートル、200メートル、4×100メートルリレーで3冠となりました。



100m,200m,400mリレーを制し3冠を獲得したジョイナー

日本のメーカーで、陸上100メートルで金メダルというのは初のことでした。それも男子はルイスでしたから、いわばアベック優勝です。これは自慢できる実績だと思います。

— 選手が金メダルを取ると、シューズの売れ行きは伸びるのですか？

どんどん売れます。そして、ブランドのステイタスがほかの競技にも波及するほどの効果がありますね。



ジョイナー選手(右)と

音速の貴公子 アイルトン・セナにも

1991年、東京で世界陸上が開催されたとき、ルイスは100メートルで9秒86の世界新記録を出して優勝しました。そのレースをパリの地で見ていたのが、F1レーサーのアイルトン・セナでした。セナの代理人から電話がかかってきて、「ミズノの靴をレースで履きたい」と。マシンもマクラーレンホンダでしたから、日本製のものに興味があったのかもしれませんが。ロンドンのテストラン用に26.5センチのシューズを送ったら、ぴったりだということで、鈴鹿グランプリの前に会って細部を詰め、気に入ってもらえました。

— レース用の靴にはどんな特徴があるのですか？

マニュアル車ですから、丸2時間もアクセルとブレーキのペダルを踏みっぱなしなのだそうです。だから靴が悪いと、タイミングが合わなくなる。そこで彼とディスカッションしながら、底の部分には母指球の下に皮膚感覚に近い特別加工を施しました。ひもの辺りは全部、防災加工し、かつ通気性の良さを大切にしました。

— 彼の死は早すぎましたね。



アイルトン・セナ (右) と

1994年5月、彼がイモラのサーキットで非業の死を遂げるまで、3年ほどスポンサーをしました。亡くなる年に電話がかかってきて、「せっかくのミズノ製の靴なのに、マシンの中では足元が見えない。だからウエジ、手袋をつくってくれ。ウイニングランでMの字がよく見えるように手を振るから」と。でも手袋を渡すことはできませんでした。それが心残りで、私はサンパウロの彼のお墓に2回もお参りに行きました。短い期間ではありましたが、セナにはお世話になりましたね。

ミズノに入社し スポーツ施設部に配属

— 世界中を忙しく駆け回る上治さんですが、ミズノに入社したきっかけは？

東京オリンピックのあった1964年、私は高校3年生でした。オリンピックが10月に開催されるため、インターハイなどの大会がすべて前倒しで行われたのです。



施設部時代

— 上治さんは陸上部でしたか？

いえ、卓球部ですよ。6月ごろでしたか、兵庫県代表として近畿大会に行ったときに、先生が「帰りにミズノに寄ってこい」と言うのです。敗退して大阪中央体育館からミズノに行き、昼時でうどんをごちそうになりました。人事課長と面接をして1週間ほどすると採用通知が届きました。大学に行きたいと思っていたのですが、先生が「ミズノには毎年採ってもらっているから辞退は困るよ」と言うので、「まあ、いいか」と入社しました。

— 卓球でしたか、てつきり陸上出身だと思っていましたよ。

よく言われます。それはいろいろな経緯があって陸上の研究をしていたからです。入社後、私は新設されたスポーツ施設部の担当になりました。3年ほどして、建築関係の勉強をしなければと思い立ち、早稲田大学産業専門学部建築本科を受験したら、たまたま受かったのです。(のちに中退) そのゼミの先生に紹介された集まりに参加したところ、西田修平さん(1932年ロス大会、1936年ベルリン大会の棒高跳び銀メダリスト)、織田幹雄さん(1928年アムステルダム大会三段跳び金メダリスト)らがいらして、オリンピックの思い出話やどうしたら世界と戦えるか、といった話を聞きながら、いろいろ教えてもらいました。

— 『陸上競技マガジン』や『月刊陸上』にレポートをお書きになっていましたよね。

ええ、アメリカの陸上が強いの、シーズン前の約1カ月間に、西海岸のLAタイムスやサンキスト陸上、そして最後にNYマジソンスクエアガーデンの全米インドア陸上選手権をやっているからだ。ならば、そのインドア陸上を研究してみようということでずいぶん書きましたね。

オリンピック憲章から「アマチュア」の文字が消えた

— オリンピックとのかかわりですが、「ミスター・アマチュア」と言われたアベリー・ブランデー氏がIOC(国際オリンピック委員会)会長をしていたころ(1952~72年在任)と比べると、ずいぶん様変わりしたでしょう?

1972年の札幌冬季オリンピックでは、「動く広告塔」と見なされ、アマチュア規定違反のかどで追放されたカール・シュランツ(アルペンスキー)の事件がありましたよね。

— **それがキラニン卿(1972~1980年在任)が会長だった1974年に、オリンピック憲章から“アマチュア”の言葉が削除され、サマランチ氏が会長になり(1980~2001年)、1988年のソウル大会あたりから、“最高レベル”の競技会をということ**

でプロ選手が出場するようになりました。

それでもIOCはIF(国際競技連盟)とは違う規定を持っていて、オリンピックのベニュー内はクリーンベニューに、つまりロゴは許さないということになっています。そこがFIFA(国際サッカー連盟)によるサッカーW杯との大きな違いですね。

しかしスポーツメーカーだけは、製造者責任ロゴが認められています。アイテムによって全部サイズが決まっています。ウエアは20平方センチ以内、アクセサリは6平方センチ以内、エクイップメント(用具)は60平方センチ以内というようになっています。



サマランチ前IOC会長

JOCとオリンピックのウエア

— JOC(日本オリンピック委員会)との関係はどうでしたか。

2000年ごろまで、JOCの内規として、日本代表選手団に関してはオリンピック・ウエアをビジネスアイテムとして使うことはできませんでした。

変化のきっかけとなったのは、サッカー日本代表の活躍ですね。W杯に初出場したのが1998年フランス大会。サポーターたちは、当時はそういう名称ではありませんでしたが、あのサムライ・ブルーのユニホームと同じアイテムを着て応援したいというスタイルになっていきました。それにあいまって、2004年のアテネ大会から、「オリンピックの終了後ならウエアの販売をしていい」となりました。

— それでも、終了後だったのですね。

そうです。オリンピック・ウェアのジャージは、普段着にもパジャマにもなります。神聖であるべきウェアを街着にされるのは選手に失礼ではないかということでした。それが昨年のロンドン大会では、納品は終了後でも、注文は先に取り替えていいというように緩和されてきています。

— メダルの感動を同じウェアを着て味わおうという流れになりつつあるのですね。



北京オリンピック日本代表選手団公式服装発表会（前列左）



長野オリンピック・ミズノサービスセンター

長野大会当時は、まず五輪マークと大会エンブレムでビジネスをしてよいとされるIOC（国際オリンピック委員会）のTOP4（The Olympic Program）スポンサーがいました。4というのは第4期の意味で、期間は1997～2000年でした。そして当社は、NAOC（長野冬季五輪組織委員会）とJOC（日本オリンピック委員会）と契約する「ゴールドスポンサー」になりました。

— 協賛金はいくらでしたか。

現金、役務、商品の合計で20億円以上です。

長野冬季オリンピックでは ゴールドスポンサーに

— 冬季オリンピックも同様の流れでしょうか。

ご存じのように、1984年のロサンゼルス大会からオリンピックは商業主義の流れになっていきます。夏季大会と冬季大会は“ジョイント・マーケティング”といってセット売りになりました。夏は200以上の国と地域が参加しますが、冬は直近のバンクーバー大会でも82ほど。夏季大会と比較すると、冬季大会のセールスは難しいのです。



サマランチIOC会長に ウェアを提供

— 長野大会では、日本代表選手団の式典用の藍色ウェアがずいぶん評判になりましたよね。

フライトジャケットをイメージしたウェアでした。あれは上下8万円ほどでしたが、約3万着売れました。

— というと、24~25億円ですね。

ええ。あのアイスホッケーの大スター、ウェイン・グレッツキー（カナダ）から「いくらでもいいから売ってほしい」とリクエストがあり、JOC経由でお渡ししたのですよ。

— わあ、名選手グレッツキーがですか。

IOC（国際オリンピック委員会）委員にはフルアイテムのウェアを提供しました。サマランチ会長と懇意にしていたのですが、とてもお洒落な方で、ボタン一つにもこだわりのある方でした。「IOCメンバーとは別なもので最高のステイタスを示したい」と言われ、何度もデザインの打ち合わせをしました。開会式するとき、左胸に五輪マーク、右腕に「MIZUNO」と入れた黒の防寒用ロングコートを着たサマランチ会長を見て、それは感慨深いものがありました。



長野オリンピック IOC 公式服装の採寸、右がサマランチ前 IOC 会長

契約はシビアに

— では、何か失敗談のようなものはありますか。

それはいろいろありましたよ。80年代前半などは、「来日してほしい」と外国人選手に依頼すると「うん、わかった」と言う。いざ来てみると、「来ることは約束したけれども（試合に）出るとはまだ言っていない。いくらくれるの？」とくる。甘かったなと反省しました。それでロッカールームからトラックに出てきたら、片方はミズノ製なのに片方は他社のシューズを履いている。「俺は両足履くとは約束していないよ」と。そんな勉強はずいぶんさせられました。



上治丈太郎氏



西田善夫氏

— 海外の選手たちは、契約にシビアなのですね。

自分の競技生命を考えて稼げる間に稼いでしまおうということですよ。1本目と2本目を違うシューズで出てきたりね。そのせいで国際陸上競技連盟は72時間前ルールをつくりました。レースの72時間前に、どこ製のシューズでレースに出場するという登録を義務づけるのです。ここ20年ほどでルールも変化し、契約書もどんどん細かくなって、最低でも20ページほどになっています。

— スポーツエージェントの世界を描いたトム・クルーズ主演の「ザ・エージェント」という映画を思い出します。

スポーツエージェントは選手の生活をギャランティーして、選手が競技に集中できる環境をつくるという役割があります。しかし私たちから見ると、選手が試合に出ることで売上（契約金）がつくれて、工場や材料の手配などの必要はないので、楽でいいビジネスだなと思うことはあります。

徹底的な動作解析で 世界一の柔道衣をつくる

— オリンピックには選手がいて、大会を運営する側がいて、我々のようなジャーナリストがいる。その中で、ミズノさんのようなスポーツ産業の面からバックアップをする人たちは、どのグループに含まれるのでしょうか。

圧倒的に、選手のサイドですね。どれだけいい商品をつくっても、選手がそれを使って実証してみせてくれないと裏付けにはなりません。我々としてはほとんど選手の要望を聞いて、それをかたちにするだけです。

— オリンピックは、選手同様に4年間の努力のお披露目の場であるわけですね。

そのとおりです。例えば柔道衣には専門のメーカーがあり、ミズノは素人のように見られていました。そこで技術開発に邁進し、1992年のバルセロナ大会では金メダリストとなった男子71kg級の古賀稔彦、78kg級の吉田秀彦がミズノ製の道衣でした。



バルセロナオリンピックで柔道男子71kg級で金メダルを獲得した古賀稔彦

— どんな特徴があるのですか。

アパレルメーカーと差をつけるために、動作解析を徹底的にやりました。組み手を取ったときにすぐ投げに入れる

ように、また持たれたときにすぐ切られないようにするなど、あらゆる技を研究して、硬さと柔軟さを両立させる柔道衣を研究しました。

— 女子柔道が始まったのがバルセロナ大会からでした。ヤワラちゃんこと田村亮子（現姓・谷）選手が登場しました。

ヤワラちゃんとは個人契約は結ばなかったものの、ミズノとして支援態勢をとっていました。

— カラー柔道衣の導入は、1996年のアトランタ大会終了後の1997年からでしたね。

選手は白と青の道衣を持つことになり、単純計算で売上は倍になりました。

石炭がダイヤモンドに、 女子アルペンの コステリッチ選手

— 自分たちが支援している選手がメダルを獲得したときは、喜びもひとしおなのでしょうね。じーんと来るのか、ああ苦勞が報われたという感じでしょうか。

ピッタリの言葉はなかなか見つかりませんが、選手とのアイコンタクトの瞬間、これはたまらないものがありますね。

— ほう。

ヤニツァ・コステリッチ（クロアチア）という女子アルペンの選手がいました。毎年、我々はアルプスのヒンタートックスという北側斜面2400メートルのところにある万年雪で、翌シーズンのスキー板をテストします。各メーカーが集まり、選手はいろいろ試すのです。

ところがヤニツァに対しては、どこのメーカーも相手にしていませんでした。彼女の父親は旧ユーゴスラビアの国粋主義者のような人で、自分の子どもを国家に貢献させたいと考え、離婚してハンドボールのオリンピック選手と再婚しました。それで生まれたのが兄のイヴィツァと妹のヤニツァです。

— 身体能力の高い子どもが生まれたわけですね。

そうです。父親は夏場はアドリア海で漁師をやり、魚を高級レストランに売りに行き生計を立てていたようです。出会ったのは彼女が16歳ぐらいのときで、リフト小屋に寝袋で寝起きするという暮らしぶりでした。父親は私に「ウエジ、何とか頼む、頼むよ」と懇願するのです。もう一人のスタッフと相談し、大した金額ではないからと、2シーズン付き合いました。そうしたらなんと、20歳で迎えたソルトレイクオリンピック(2002年)で、回転、大回転、複合と3つの金メダルですよ。



ソルトレイクシティオリンピックでアルペン3種目で金メダルのコストリッチ

— はあ、3冠だ。

当時は全くの無名でしたから、ヨーロッパのメーカー連中には、「ウエジは石炭を買ってダイヤモンドにした」と言われました。

W杯でも世界選手権でも、彼女は勝利を積み上げました。当然、とてつもないオファーが入ってくるわけです。それでも「あのときに助けてくれたのはウエジたちだから、出せる金額でいい」と言ってくれました。我々は次の4年間だけ甘えさせてもらいました。これは忘れられない契約でしたね。

室伏広治選手は 漬け物石でトレーニングし 赤ちゃんを分析する

— そんなことがあるのですね。日本選手はどうですか。

やはり小学校4、5年のときから知っているハンマー投げの室伏広治選手でしょう。2004年のアテネ大会、1位だったアヌシュ選手(ハンガリー)がドーピング違反で金メダルを剥奪され、室伏選手が繰り上げ金メダルとなりました。あの背景には本当にいろいろあったのですよ。

— そうでしたか。選手の生活やトレーニングの環境が安定するにつれ、選手寿命も延びていきますね。トレーニング次第で、年齢をカバーするだけの技術をもにすることができるようになる。室伏選手なども年々成長といいますか、進歩を感じます。

おっしゃるとおりです。彼の場合は、ロンドンオリンピックでは8月3日が予選、5日が決勝でした。それならば、どの段階でピークを調整するというように、4年間を逆算しながらトレーニングプランを立てていたのです。

とはいえ、彼も38歳です。体中、傷んでいる箇所もあります。フリーウエイトでのトレーニングで使う筋肉に限られてしまうということで、彼は漬け物石を持ってきて、使っていない筋肉はどこかMRIで調べたのです。もう一つの研究題材はなんと赤ちゃんですよ。



アテネオリンピック・ハンマー投で金メダルを獲得した室伏広治

— 赤ちゃん？

まだ立つことのできない生後4~5カ月の赤ちゃんの寝返りを分析するのです。どの筋肉を使って寝返りを打っているのか。また手のひらに乗せて、どんなかたちでバランスを取り、体幹の動きはどうなっているのか等、常にそういう視点を持っています。

— 完全に研究者ですね。

博士号も取っていますからね。彼はシャイな人柄ですから自分では言いませんが、非常に努力しているからこそ、日本選手権19連覇などという偉業ができるのですよ。

— 選手たちをサポートする立場からだと、オリンピックではまた違った風景が見えるのでしょうか。

4年に一度のスポーツ大会の最高峰とされるオリンピックに向け、選手にはそれぞれに100以上のストーリーがあるわけです。それを目の当たりにしているので、“オリンピック教”のようなものに染まってしまうような不思議な感覚がありますね。かかわればかかわるほど得られる感動も深くなります。

ミズノ所属アスリートのセカンドキャリア

— ミズノさん所属の選手のセカンドキャリアについては、どのような考え方を持っていますか。



上治丈太郎氏

まず1988年のソウルオリンピックのとき、ミズノ所属のアスリートは一人もいませんでした。そこで私はソウル後に、「この会社はこんなことでいいのか!」と役員会で怒鳴り散らして、夏冬合わせて5人分の選手枠をもらいました。その後、採用したほとんどのアスリート社員が日本新記録を出しています。2000年のシドニー大会では、6名の陸上選手が出場しました。1社から6人というのは陸上初でした。

— 入社条件はどうなっていますか。

業務内に選手活動をしていい社員については、関東インカレで優勝、全日本インカレで3位以内、日本選手権でも3位以内という条件を設けました。なおかつ2年の間に指定大会で3位以内、あるいは自己新記録を出せば競技を続行してよしい。給料はその年代の平均年収ですが、競技費用は一切ミズノがフルサポートするという条件です。栄養費から、合宿費、海外渡航費、留学もOKです。

— 室伏選手も社員なのですね。

そうです。室伏選手は中京大学卒業後、1997年に普通に試験を受けての入社です。

セカンドキャリアについては、選手生活を終えたあとそのまま社員として仕事を続けることができます。今まで会社に残った人は半数ぐらいで、半分は教員というケースが多いですね。

オリンピック選手と感動を共有できる仕事

— 上治さんが携わっておられるスポーツビジネスは、学生にとっては非常に興味のある分野だと思いますね。

早稲田大学ビジネススクールで何か持たせていただいたり、他にも大学で講義をさせていただくことはよくあります。「オリンピックの代表選手になれなくても、この仕事にかかわれば、オリンピックの感動を共有できます。労働条件や給与を超越したやりがいや、夢を追いかけ自らの手につかみたいという人。一生とは言いません。10年間、この仕事をやってみたいと思う人は、遠慮なく受験してください」と話しています。

—裏方ですから、大変なこともあるのでしょうか。

夜討ち朝駆けですからね。例えばアルペンでいうと、雪温の情報や天気予報等のデータをそろえておいて準備をする等、やらなければいけないことはたくさんあります。その大変さを乗り越えてもメダル獲得に貢献したいと思う人はどうぞ来てくださいと。本当の感動は銭カネに代えられるものではなく、人間を一回りも二回りも成長させてくれますから。



ロンドンオリンピック200m背泳で銅メダルに輝いた寺川綾

—応募者は多いのでしょうか？

50人採用のところ、2万人以上の応募があつたりします。

—上治さんご自身、スポーツに対する夢を更に突き詰めていきたいという思いがあるのでしょうか。

少し違うかもしれませんがね。オリンピックの在り方をとことんまで追いかけてしまうと、どろどろする部分もあるわけですよ。資金を注ぎ込み放題というのも少し違う。そこで一步引いた目で、適正基準を見極めて整理をすることも必要になります。



スピードスケート銅メダリストの橋本聖子（左）と

市場影響力の大きい 本田圭佑モデル 「イグニタス」

その整理がうまくできているのが、サッカーの本田圭佑選手だと思いますね。彼とは名古屋グランパス時代からの付き合いですが、2010年FIFAワールドカップ南アフリカ大会が終わり、次の契約についての話し合いに担当課長が行きました。すると「上治さんが来てくれないと話ができない」と言うのです。条件の問題かと思ったので、「担当者でも私でも条件は一緒だよ」と言ったら、「いや、違います」と。



南アフリカワールドカップで活躍した本田圭佑

—なぜだったのですか。

W杯のデンマーク戦で本田選手はFKで無回転シュートを決めました。あのシュートを生んだスパイクは、黄色い「イグニタス」というモデルでした。データを集め丹念に解析をしてつくりあげたものでした。当初7万足の予定が彼の活躍で25万足の売上になり、久しぶりに選手が市場に大きな影響力を及ぼしました。

—計画の4倍近くですね。

そうですね。たくさんの条件をつける選手が多い中、彼の条件は唯一、「自分が気に入る商品をとことんつくってくれるメーカーであればいい。それはミズノしかないと思っている。そのために会社として担当役員の保証がほしい」ということでした。自分のためにどれだけの投資をしてくれるか、思いの丈を語り、聞きたいということだったのです。

「究極のスパイクを つくってくれるメーカーは ミズノしかない」

具体的には、無回転のボールが打てるという特徴に加え、内側のパネルを改良して、野球でいうスプリットボール（より速い球速で小さく落ちる）のような縦回転シュートを打てるスパイク。本田選手の脚力にマッチしたミドルシュートをねらえるスパイクでした。

— その結果生まれたのが、イグニタスの新モデルですか。

そうです。自分が求める究極のスパイクをつくってくれば銭カネは二の次。素晴らしいプロ根性を持った選手ですよ。

自慢になりますが、南アの大会では中村憲剛選手、岡崎慎司選手と、4得点中3得点がミズノのスパイクから生まれたものでした。中村選手は本田選手に、「シュートを決めたらまずベンチに來いよ」と話していました。「ベンチの選手は出場したくて、もんもんとしている。おまえ一人ではしゃぎ回ったら許さないからな」と約束していたのです。そしてそのとおり、FKを決めた本田くんは真っ先にベンチに駆け寄っていきました。



南アフリカワールドカップ
岡崎慎司もミズノのスパイクを着用して活躍

— ああ、行った、行った。

いい連携でしょう。今のA代表はとてもまとまりのいいチームですよ。

2020年の夏季 オリンピック開催地は？

— さて今年は、7年後の2020年夏季オリンピック大会の開催地を決める大事な年です。かつては5年前の決定でしたよね。1964年の東京オリンピックも72年の札幌オリンピックも、決定は5年前でした。

そうでした。



IOC総会でオリンピック開催が決定しロゲIOC会長から祝福を受けるロンドン代表団

— 東京オリンピックが決まった1959年、私はアナウンサーになって2年目でした。東京で国民体育大会が開催された年で、私はマラソン中継のため北海道から手伝いに来ていました。その国体の最中に東京オリンピック開催が決まったのです。そう考えると、今年は「スポーツ祭東京2013」という名称ですが、あのとき以来、また東京に国体が巡ってきている。国体とオリンピックを結びつけて考える人はほとんどおらず、それだけ僕は古いのだと思いますが、ちょっと縁起がいいなと勝手に思っています。上治さんの見通しとしてはどうでしょうか。

1988年以降、IOC（国際オリンピック委員会）総会をウォッチし続けていますが、毎日のように潮目が変わりますので、直前1週間前ぐらいにならないとわからないで

しょうね。サマランチ会長の時代は、評価委員会によるリポートのコンクルージョンなどから、IOCはどここの都市でやりたいというようなメッセージが盛り込まれていました。でも今のジャック・ロゲ会長は根回しもせず、右腕とされる人物もないので、本当にわかりません。

イチオシでなくても 2回目は東京に投票して もらえるように

— 2016年の開催地決定の際はどうでしたか。

あのときは、個人的にも関係者たちも本命のシカゴと東京で最終決戦をするというストーリーで、リオデジャネイロは早めに落ちるだろうという読みでした。



2020年オリンピック・パラリンピック招致活動

— そうそう。それなのに本命シカゴが1回目、東京が2回目で落ちてしまい、1回目にトップだったマドリードをリオが逆転したのです。

1回目に投票する都市は付き合いや義理で決める場合が多くあります。結局、自分が推す都市が消えたあと、2回目の投票でどこに入れるのか、この票をつかむことでしょう。プレゼンテーションで印象に残ったほうに投票するという選択肢もあるかもしれません。当日のプレゼンで開催地を決定するIOC委員は2割程度かなというのが私の感触です。

— 今回は3都市ですから、1度目の投票で過半数を獲得する都市がなければ2都市で2回目の投票を行うことになります。その際には、もう一度、プレ

ゼンをするのですか。

いえ、しません。今回のIOC総会はブエノスアイレスで開かれます。3都市が立候補していますから、最大でも投票は2回です。これまでのパターンと同様であるとすると、9月7日の11時からプレゼンが始まります。プレゼン時間は50分、クエスチョン&アンサーが15分から20分、午前中に1都市、午後には2都市行きます。そのプレゼンが終わってから電子投票をして、発表は17時です。

— 電子投票なのですね。1回目の投票で開催地が決定すれば発表時間は早まりますか。

いえ、セレモニーの関係で発表時間は動かないと思います。

1964年東京オリンピックを 手繰り寄せた 平沢和重氏の招致演説

— 招致プレゼンテーションといえば、1959年のIOC総会はドイツのミュンヘンで開かれました。日本の招致演説に立ったのは、平沢和重（ひらさわ・かずしげ）さんという元外交官でNHKの解説員室におられた方でした。今の時代ならパワーポイント等を使って視覚に訴えるのはあたりまえですが、当時、太いマジックで白い紙に文字を書きながらのプレゼンは新鮮でした。

なるほど。



1964年東京オリンピックの開催決定の知らせを受け喜ぶJOC役員



東京オリンピック開会式・聖火点火

— 「私はどこから来たのか。皆さんは“極東”という表現をされるかもしれませんが。ファーイースト、東京は遠いところだと思われるでしょうが、地球は丸いのです」と言いながら、日本の位置を説明されたのです。そして、「東京でオリンピックが開催されたら、そこはもう世界の中心地になるのです」というような名演説でした。

持ち時間の30分のうち15分ほどで終わり、残りの15分はどうしたかという、フランス語で通訳された音声をもう一度流し、それも効果的だったと言われています。

2020年東京オリンピックは 次の100年のレガシーをつくる

— 日本人のスポーツに対する感覚は、少しずつ国際的になっていると感じています。そもそもサッカーW杯大会に5回連続出場できるなんてかつては考えられませんでしたし、野球ではWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）という国際大会もできました。それらを生観戦したり、放送を見て、スポーツに感心を持つ人が広がってきています。もし東京がオリンピックを招致できたら、それはスポーツ界への更なる後押しになりますね。

本当にそうですね。スポーツ界の人間にあるまじき発言かもしれませんが、はっきり言って今は、1964年東京オリ



東京オリンピック開会式で空に描かれた五輪

ンピックのレガシーを食いつぶしている気がしてなりません。オリンピックを契機にできた仕組みが、いろいろ制度疲労を起し始めているのが実情なのだろうと思います。ですから2020年のオリンピック招致に成功したら、新しいレガシーをつくる大きなエネルギーになるだろうと期待しています。

スポーツで 健全な青少年育成を

— 待望久しいスポーツ庁の設置についてはいかがですか。

はい、私は中央教育審議会のスポーツ・青少年分科会の委員をさせていただいています。中学生を例にとると、スポーツの部活に参加していない子どもは60%もいるそうです。しかし、団体行動を学んだり、また自分だけでなく人の

痛みを知るなど、成長期にスポーツをすることは健全な青少年の育成につながると確信しています。それはまた、クーベルタンが提唱したオリンピズムにもつながることです。全員が一流のアスリートを目指す必要はありません。スポーツは基礎体力をつける上でもたいへん有効です。そこで、父兄も含めてスポーツの楽しさを知っていただきたい。スポーツは人間を成長させる最もいい手段だと思うのです。スポーツで健康を手に入れる、人とのコミュニケーションを豊かにするなど、有形無形のメリットがあります。スポーツ振興法が改正され、スポーツ基本法ができました。私どもは商売とは関係なしに、生涯スポーツの振興に積極的に協力したいと思っています。



スポーツフォーオール



ロンドンオリンピック柔道女子57kg級金メダルの松本薫

ロンドン大会で、私どもは17競技団体のスポンサーを務めました。大会後、多くの選手がわざわざ会社にあいさつに来てくれました。

柔道で唯一の金メダリストとなった女子57kg級の松本薫選手などは一人で来られて、「本当にありがとうございます」と感謝されました。

手書きの礼状をくれる 高梨沙羅選手

スキージャンプの高梨沙羅選手のジャンプスーツも、ミズノ製です。彼女はシーズンが終わると必ず「ありがとうございました」という手書きの礼状を送ってくれます。彼女とは契約を結んでいるわけではないのですが、そんな手紙をもらうと、今後ますます充実したサポートを提供しなければという気になります。



ジャンプワールドカップ2012/2013で個人総合優勝を果たした高梨沙羅

“技術力”で勝負していく

— 他メーカーさんの動向はどの程度気にされ、差別化を図っているのでしょうか。



例えば「スポーツウエア」といっても、その定義づけは難しくなっています。ミズノの戦略は、ズバリ「技術力で勝負」です。真剣勝負の競技会で、ナンバー1の結果を出せる製品をつくり、アスリートを支えていくことを目指してやっています。

— 昨年のロンドンオリンピックで、日本選手団は史上最多の38個というメダルを獲得しました。ミズノさんの貢献度は高かったと思いますが、たくさん喜びを分かち合ったのでしょうかね。

— まだ16歳なのにしっかりしていますね。ソチ冬季オリンピックはもう来年ですね。

ソチはおそらく、私が統括リーダーを務める最後の大会となると思います。高梨選手には、なんとしても金メダルを取ってほしいと願っています。FIS（国際スキー連盟）はすぐにレギュレーションを変えたりしますが、私たちの究極の目標は、「これを履いたら必ず勝てる」「これを身に着いたら必ずポテンシャルやパフォーマンスが上がる」という夢の商品をつくることなのです。



— しかしレギュレーションは、やはり日本選手が強くなると変更されてしまうということなのでしょうか。

FINA（国際水泳連盟）もそうですが、ヨーロッパ中心にルールが動いているという点は否めませんね。

ソチ冬季オリンピック期待のアスリート

— ソチ大会で、ほかに注目したいヤングアスリートは誰ですか。



ソチオリンピックで飛躍が期待されるスピードスケートの高木美帆

スピードスケートの高木美帆選手です。前回のバンクーバー大会の女子チームパシュートで、日本チームは銀メダルを獲得しました。以前なら、エントリーした選手は全員メダリストのはずでした。しかしあのときは、決勝で滑らなかった高木選手はメダルをもらえなかったのです。田畑

真紀、穂積雅子、小平奈緒の3選手から「ごめんね」とメダルをかけてもらっていましたが、本人は非常に悔しかったはずですよ。ですからソチでは、その屈辱をぜひ晴らしてもらいたいものです。

ほかには、長野大会以来、苦節15年、久しぶりのオリンピック出場を決めたスマイルジャパン（女子アイスホッケーチーム）にも期待しています。



ソチオリンピックの出場を決めた女子アイスホッケーチーム

— ではソチ大会でも、メダル獲得に向けて全力サポートですね。

はい。私どもはオリンピックで、夏の競技は26競技のうち17競技を、冬の競技では7競技中ボブスレー、リュージュ以外の5競技のスポンサーをさせていただいています。これからも引き続き、選手に最高のプレーをしてもらうことを使命と考え、理念であるスポーツの振興を通じての社会貢献をしていくつもりです。

— 今回は初めてアスリートではないゲストをお迎えして、スポーツの周辺のお話を伺うつもりでしたが、周辺どころかまさにど真ん中だなという思いを強くしました。長い時間、どうもありがとうございました。

ミズノの歴史

1906
明治39 水野利八、弟利三と大阪北区で「水野兄弟商会」を創業。洋品雑貨のほか野球ボールなどを販売

1910
明治43 店舗を大阪梅田新道に移転。同時に「美津濃商店」と改名。既製運動服装を販売

1918
大正7 オーバースーター、カッターシャツ、ボストンバッグ、ランパンなど、ネーミング・アイデア商品発売

1923
大正12 国内スキーの開発を始める

「美津濃運動用品株式会社」に組織変更

1924
大正13 バリオリンピックに参加(オリンピック初参加)

1927
昭和2 大阪淀屋橋に本社屋完成

東京、大阪、京都、神戸に初のアマチュア・スキークラブ設立

1928
昭和3 アムステルダムオリンピックで、ミズノ使用選手が初のメダルを獲得

1932
昭和7 レークプラシッドオリンピックで、日本代表選手団にスキーウェアを提供

ロサンゼルスオリンピックで、ミズノ社員の南部忠平が陸上三段跳びで金メダルを獲得

1933
昭和8 日本初のゴルフクラブ「スターライン」発売

1936
昭和11 ベルリンオリンピックで、ミズノ社員の太沢礼子が高飛び込みで4位入賞

1940
昭和15 ミズノ製グライダー-301型ソアラーで吉川精一が高度・滞空新記録樹立

1942
昭和17 「美津濃株式会社」に社名変更

1945 第二次世界大戦が終戦

1947 日本国憲法が施行

1947 上治丈太郎氏、兵庫県に生まれる

1948
昭和23 ロンドンオリンピックでスミス選手(米)がミズノ製ポールを使用し、棒高跳で優勝

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 安全保障条約を締結

1955 日本の高度経済成長の開始

1964
昭和39 東京オリンピックに協力

1964 東海道新幹線が開業

1965
昭和40 養老に世界最大規模のゴルフ工場開設

1965 上治丈太郎氏、ミズノに入社

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1972
昭和47 札幌オリンピックのオフィシャル・サプライヤーを務める

1973 オイルショックが始まる

1976 ロッキード事件が表面化

1978 日中平和友好条約を調印

1980
昭和55 モスクワオリンピックのオフィシャル・サプライヤーを務める

1982 東北、上越新幹線が開業

1984
昭和59 サラエボオリンピックのオフィシャル・サプライヤーを務める

ロサンゼルスオリンピックでは、日本代表選手団の公式トレーニングウェアをはじめ、15か国の選手がミズノ製品を使用

水野健次郎、レジオン・ド・ヌール勲章受章、オリンピック・オーダー受章

1984 香港が中国に返還される

1987
昭和62 社名表記を「ミズノ」に統一

1988
昭和63 カルガリーオリンピックで、サービスセンターを開設

ソウルオリンピックのオフィシャル・サプライヤーを務める

ラグビーニュージーランド代表「オールブラックス」とサプライヤー契約

1989
平成元年 第1回「ミズノ TOKYO オープンゴルフトーナメント」開催

ミズノの歴史

1991
平成3

ユーゴスラビアのサレッチ選手がミズノスキーで、ワールドカップ第4戦で3位入賞。日本製スキー初の表彰台

日本サッカー協会「Jリーグ」設立準備室と、参加全10チームのユニフォーム等の開発供給および広報協力に関する契約を締結

1992
平成4

関西初のテニスの女子国際公式戦「ミズノワールドレディス'92」開催

アルベールビルオリンピックでミズノ使用選手が計29個のメダルを獲得

バルセロナオリンピックでミズノ使用選手が計72個のメダルを獲得。オフィシャル・スポンサーを務める

1993
平成5

リレハンメルオリンピック組織委員会の日本国内でのオフィシャル・スポンサー契約を締結

「第4回世界陸上」(シュツットガルト)でミズノ使用選手が計51個のメダルを獲得

1994
平成6

新・保温素材「プレスサーモ」を東洋紡と共同開発、リレハンメルオリンピックの全日本ナショナルチーム公式ユニフォームに採用

リレハンメルオリンピックでミズノ使用選手が計31個のメダルを獲得

1994 上治丈太郎氏、
販促本部長兼オリンピック準備室長に就任

1995
平成7

アトランタオリンピックの日本国内での公式スポンサー契約に合意

アトランタオリンピックのサプライヤー契約締結

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996
平成8

アトランタオリンピックで、ミズノ使用選手が計42個のメダルを獲得

1996 上治丈太郎氏、
取締役販促本部長兼オリンピック統括に就任

1998
平成10

長野オリンピックに、ゴールド・スポンサーとして参加。ミズノ使用選手が計40個のメダルを獲得

2000
平成12

シドニーオリンピックでミズノ使用選手が計28個のメダルを獲得。また、オフィシャル・スポンサーとしてサービスセンターを開設

2002
平成14

ソルトレークシティオリンピックでミズノ使用選手が計20個のメダルを獲得

2004
平成16

アテネオリンピックで、ミズノ使用選手が計47個のメダルを獲得

ミズノ社員の室伏広治が男子ハンマー投げで金メダルを獲得

水野正人、「世界オリンピックズ協会」から表彰

2005
平成17

世界柔道カイロ大会で、ミズノは日本代表チームのオフィシャル・サプライヤーとして、大会をサポート

2006
平成18

創業100周年

トリノオリンピックで、JOCスポンサーとして日本代表選手団にオフィシャルウェア、バッグを提供

2008
平成20

北京オリンピックで、日本代表チームに、参加26競技中17競技でサプライヤーとしてユニフォームや用品を提供

アメリカバレーボールチームのウェア、中国卓球チームのシューズなど延べ25か国のチーム、選手をサポート

2008 リーマンショックが起こる

2010
平成22

NPB(社団法人日本野球機構)がプロ野球12球団の試合球を統一。ミズノが納品することに決定

バンクーバーオリンピックで、ミズノ使用のチーム、選手が計9個のメダルを獲得

2011 上治丈太郎氏、取締役副社長に就任

2013 上治丈太郎氏、相談役に就任

上治 丈太郎 (うえじ・じょうたろう)

1947年兵庫県生まれ。65年ミズノ株式会社入社後、オリンピック準備室長、オリンピック統括などを経て、2013年6月より現職。(公財)日本オリンピック委員会国際専門部員などを歴任。

西田 善夫 (にしだ・よしお)

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』(丸善)ほか。

山本 尚子 (やまもと・なおこ)

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

フォート・キシモト (写真提供)

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作 公益財団法人 笹川スポーツ財団

後援 文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、
特定非営利活動法人 日本オリンピック協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会

メディア協力 (株)共同通信社、サンケイスポーツ

特別協力 (株)アシックス、(株)伊藤園